

# 初恋



小城ゆり子

おばあちゃんが死んだ。

おばあちゃんは、ずっと前、私が小学生だったときから、寝たきりだった。食事  
も一人ではできなかつたし、トイレにも起きられなかつた。だから、お母さんがつ  
きつきりで世話していた。おかゆをスプーンで口へ運ぶのも、おしめを替えるのも、  
床ずれができないようときどき体を動かすのも、みんな、お母さんがやっていた。  
おばあちゃんは、お父さんの母親なのに、お父さんは何もしなかつた。

家事は、お母さんはおばあちゃんの世話の間にしなければならぬので、主に私  
が手伝っていた。弟は何もしない。私は、小学生の頃から、炊事も掃除も洗濯もし  
ていた。ほんの小さい頃から、お母さんが教えてくれたので、私が主婦の仕事をやっ  
ていた。クラスの皆は、塾に行っていたけれど、私は家の仕事をしなければならぬ  
ので、塾には行っていなかつた。学校の勉強の予習・復習も、なかなかやる時間  
がない。これで高校に受かるだろうか？ 心配だった。

でも、私が中学一年の夏、おばあちゃんはどうとうあの世へ旅立った。「家で死  
にたい」といつも言っていたおばあちゃんだったが、肺炎になったため、病院に入  
院させられ、そこでまもなく亡くなった。家では死ねなかつた。

その日、学校から帰ると、家に誰もいなくて、お母さんの手紙がおいてあつた。

——おばあちゃんが危篤なので、病院へ行っています。帰ったらすぐに病院にき  
てください。——

とだけ書いてあつた。

私が病院に駆けつけると、おばあちゃんの枕もとに、お母さんのほか、真美おば  
ちゃんと貞子おばちゃんとがいた。お父さんもおじさんたちもいなかつた。

「おばあちゃん！」私が呼びかけると、

「ゆ、き、な……ゆ、き、な……」とおばあちゃんは私の手をとろうとした。私は

駆け寄って、おばあちゃんの手を握りしめた。私の名は、雪菜という。

「おばあちゃん……」おばあちゃんの手はまだ温かつた。

「さ、よ、な、ら……」

「お、おばあちゃん……」

おばあちゃんはもう答えてくれなかった。

「お母さん！」真美おばちゃんと貞子おばちゃんとお母さんが泣きながらおばあちゃんの体に抱きついた。

それが最後だった。

まもなくお父さんとおじさんたちが駆けつけてきた。葬儀社の人までやってきた。おばあちゃんの遺体は、霊安室に運ばれ、そこから葬儀社の人に引き取られた。病院の裏口に、看護師さんたちが集まって、見送ってくれた。

お通夜。親戚中の人たちが来てくれた。お父さんの会社の人たちまで来てくれた。花輪もいっぱい飾られた。

そして告別式。棺に入れられたおばあちゃんに、みんなが、花を入れる。花でいっぱい飾られて、棺に釘が打たれる。

霊柩車。位牌を持ったお父さんが、霊柩車の助手席に乗り、みな、バスで後に続いた。火葬場まで一時間もかかる。

初めて見た火葬場では次々と遺体が焼かれていた。おばあちゃんの棺も中に入れられる。私たちは控室で待っていた。おばあちゃんの体が焼き尽くされるまで。

そして、骨を拾う……。

年をとったおばあちゃんの骨は、ぼろぼろになっていた。

さようなら、おばあちゃん……

「死」ってこういうものなのか、と私は初めて知った。怖かった。

その時、私はまだ十二歳だった。子どもだったのに、「死」を知ってしまった。死ねば棺に入れて焼かれ、骨しか残らないのだ。その他の、おばあちゃんの体はどこへ行ったのだろうか？ 心は、おばあちゃんの魂はどこに行ったのだろうか？ 魂は天国に行った？ 天国ってどこにあるの？

どこにもない。おばあちゃんはどこにもいなくなってしまったのだ。死ねばすべてなくなるのだ。

私んちは無宗教だ。一応、おばあちゃんのお葬式は仏教でやったけれど、お父さんもお母さんも仏教なんて信じていない。信じているような顔をしているけれど、

ほんとうは信じていないんだって、私は知っている。神様も仏様も実際にはいない。みんな、いるようなことを言っているが、ほんとうはそんなものはいないんだって知っているのだ。

死ねばすべてなくなる……。。

何も残らない。

考える心、感じる心、意識……すべてなくなる。

そこにあるのは限りない「無」の世界。

その恐ろしい事実を、私は十二歳で知ってしまった。

いつかこの私にも「死」が訪れる。私というものがなくなってしまふ。死んだらどうしよう？ まだ八十年先？ 何十年先？ あるいはもっと早く、その時は確実に訪れる。私は怖い。

おばあちゃんの亡くなったのが悲しく、自分にもいつか来るこの「死」が恐ろしい。頭がガンガンする。「死」が恐ろしいって、そのことばかり考える。他のことは考えられない。

みんな、どうして平気でいられるのだろうか？ お父さんはいつも通り会社に行くようになったし、お母さんは家事を始めた。もう私に手伝ってくれなくてもいい、お前は塾にでも行きなさい、って言う。夏休みが終わったら、高校受験のために塾に行つて、遅れていた勉強を取り戻しなさい、って言う。でも、勉強って何のためにするの？ 人生のゴールが「死」だってわかったのに、何のために勉強なんかするの？ どうせ最後は死ぬんじゃない。どうしてみんな、それなのに平気で生きていられるんだろう？

私は頭痛に苦しんだ。「死」の恐怖と不安ばかり考える。何も手につかない。きつと精神科に行ったほうがいいのだろう。「死」の恐怖と不安から逃れられるなら、精神科にでもどこへでも行きたい。でも、まだ子どもの私は、どうやって精神科に行けばいいのか、わからない。

周囲の皆は、お父さんもお母さんも含めて、私がこんなに苦しんでいるって知らない。私はわざと明るく振る舞う。明るく朗らかにしていれば不安から逃れられるような気がして、明朗に振る舞う。心の中は真っ暗なのに、私は冗談なんか言ったりする。学校の教科書を開いてみる。勉強する。いつか来る「死」を恐れている、やはり高校受験に失敗するのは嫌だ。九月になったら、友だちみたいに塾へ行こう

と思う。

おばあちゃんのベッドを片付け、おばあちゃんの使っていたものを捨てたら、狭い我が家も少し広くなった。お父さんもお母さんももう泣かない。おばあちゃんのない、平和な四人家族の生活が始まった。

苦しんでいるのは私だけ。お父さんもお母さんも、弟の光男も、苦しんでなんかいない。なぜ？

どうやったら、私も、みんなのように、また以前の私のように、苦しまずに生活できるのだろうか？

(2)

学校が二学期になった。転校生が来た。川田恵介くん。新潟市の学校からやってきた。何でも、恵介くんは、お父さんとお母さんが交通事故で一緒に亡くなって、小学生の妹と二人、田舎の親戚に預けられたのだという。暗い目をした少年だった。なんでも、お父さんが運転しお母さんが助手席に乗っていた車が、居眠り運転していた対向車に衝突され、お父さんもお母さんも即死したそうだ。

先生の配慮で、私は恵介くんと席を並べることになった。身内を亡くした者同士、ということだろう。でも、私は長い間患っていたおばあちゃんが死んだだけだし、恵介くんは両親を亡くしたのだ。きつとどんなにかつらかっただろうと思う。私たち家族みたいに、邪魔者が死んでほっとしているのとは違う。こんな言い方をして悪いけれど、お母さんも、お父さんまで、おばあちゃんが死んでほっとしているのだ。私も、もしもお父さんとお母さんが亡くなったら……どんな気持ちだろうか？ 私はまだ十二歳なのに、突然、お父さんとお母さんとが一緒に交通事故で亡くなって、弟と二人、世間に投げ出されたら……どうなっちゃうんだろう？ 悲しいだけじゃなくて、これからどうやって生きていけばいいのか。真美おばちゃんや貞子おばちゃんに頼るしかないのか？ 恵介くんの境遇はあまりに過酷だった。

恵介くんは、鉛筆もノートもちゃんと持ってこれないようだった。私は気の毒で、それらを貸してあげたりした。恵介くんは、お小遣いも貰えないようだった。

「ぼく、高校に行けるかなあ？」

と彼は心配そうに言う。

「おじさんが高校にやってくれないの？」

「うん……弁護士さんが、ぼくや妹が高校に行くくらいのお金は交通事故の補償金で貰えたって言ったんだ。ぼくがまだ未成年だから、そのお金はおじさんに預けたって。でも、おじさんは何にも言わないんだ」

「お金、盗られちゃったの？」

「わからないけれど……」

大人って勝手だな、と思った。子どものお金を盗るなんて。

恵介くんのおじさんちは農家なので、彼は学校から帰ると、農作業の手伝いをやらされていた。土曜日も、日曜日も、働かされていた。妹と二人、食べさせてもらっているだけで、しかたがない、と彼は思っているようだった。働くのは私もおばあちゃんが生きていた頃は家の仕事を手伝っていたから、当たり前のような気がしていた。でも、ただ働かされるだけで、鉛筆を買うお小遣いも貰えないなんて、ひどい、と思った。私のお父さんやお母さんが亡くなったら、私も真美おばちゃんや貞子おばちゃんに同じように扱われるんだろうか？ おばちゃんたちがそんな不人情な人とは思えなかった。お金を盗るとも思えなかった。恵介くんには他に親戚がいないんだろうか？

私は二学期から塾にやってももらえていたが、もちろん恵介くんはやってももらえない。学校にやってもらえるだけでありがたい、と思わされているようだった。彼の不幸は、お父さんとお母さんを亡くしたことでだけではなくて、おじさんたちに情がなかったことにあったようだった。

彼は勉強が普通で、成績が特に良くも悪くもなかったが、図画工作が一番だった。絵が、とても上手だった。彼の描く絵は、風景画でも、とても上手だった。いや、ただ上手というのではなく、心の奥深くに響いてくるような、見ていると中に心が引きこまれていくような、そういう絵だった。私なんかにはとても描けない。彼はどうしてそんなに絵がうまいのだろうか？

一度聞いてみたことがある。

「恵介くんは、絵を描くとき、何を思っているの？」

「何って……亡くなったお父さんやお母さんのこと」

「そう……お父さんやお母さんが亡くなったら、私なら生きていけないかもしれないな  
ら」

「生きていけないたって、生きるしかないんだ。ぼくには妹もいるし。天国で、お父さんやお母さんが、妹のことを頼むねっていつもぼくに言っているんだ」

「天国って、あるの？」

「ないかもしれないけれど、ぼくにはそう感じられるんだ。ぼくはしっかり働いて、妹を独り立ちさせなければならぬんだ」

「偉いのね」

「偉くなんかないさ。ぼくのような境遇におかれたら、誰だってそうするよ。君だって、そうするさ」

「そうかなあ……」

恵介くんのような境遇になったら、私も弟のために働くだろうか。「死」の恐怖なんて、しょうもないことを考えて頭痛に苦しむのではなく、もっと積極的に生きられるだろうか？ 私は恐怖と不安に苦しんで、でもそれは一種のぜいたく病なのだった。自分でもわかっていた。恵介くんに比べたら、自分がどんなに幸せなところか。それはわかっているのに、わかっている不安と恐怖から抜け出せなかった。お母さんに言ってみたことがある。

「ねえ、お母さん、お父さんやお母さんがもしも亡くなったら、私はいったいどうなるのかしら？」

「何を言うんだね、この子は」おかあさんはあきれたようだった。

「親が、まだ子どもが小さいってのに、死ぬわけがないだろ」

「そうなの？」

「そうだよ」

「でも、うちのクラスの川田恵介くんのうちでは、お父さんとお母さんが交通事故で先に亡くなったのよ」

「それは不運だね」

「不運？ 不運で済むことなの？」

「そんなこと、めったにないよ。そんなことをお前が考えなくてもいいんだよ。お父さんもお母さんもまだ死なないから」

「そう……」

「小さい子どもを残して死ぬのは、無念だろうね。気の毒だね」

きつと恵介くんのお父さんとお母さんとは、心残りだっただろうと思う。「死」は、

いつ、誰にやってくるか、わからない。私にもやってくるかもしれない。「死」がやってきたら、どうしよう？ 私に死んだら、お父さんとお母さんとはどうするだろう？

私は恵介くんがかわいそうでならなかった。そして、これが初恋というものなのかと思った。

(3)

私は恵介くんともっとお友達になりたいのに、なかなか親しく口がきけなかった。でも、学用品のことで彼がいつも困っていたから、そっと鉛筆や消しゴム、ノートや絵の道具などをあげていた。

「これ、あげる」と言うと、彼はいつも、

「ごめん、いつも悪いなあ」と言いながら受け取る。

「いつか、きつと返すから」とも言う。

「いいのよ、返さなくても。私にはお父さんもお母さんもいて、困っていないんだから」

「いいなあ。ぼく、うらやましい」

ごく当たり前のこと、子どもにお父さんやお母さんがいるってこと、それがうらやましいなんて。

でも、私も恵介くんがうらやましかった。それは彼は絵がうまかったから。私も何か人よりできることがあるといいのに……勉強ができるとか、文章がうまいとか、何か特別にできることがあるといいのに、私は平凡な中学生で、その上、ノイローゼなのだった。「死」の恐怖と不安におびえていて、頭が痛くて、そんなことを考えてもしょうがないから考えるのをよそう、と思っても、やめられないのだった。

孤児の恵介くんはいつも暗くて、ノイローゼの私もいつも暗くて、暗いもの同士で仲良くしたくて……いつももう一步踏み込めないでいた。明るいもの同士はすぐ仲良くなれるのに、暗いもの同士はなかなか親しくなれない。私にできることは彼に学用品をあげることくらいだった。

中三になった。私と彼とは、やはり同じクラスだったが、席は替わっていた。



あるとき、図画の先生が言った。「男の子は女の子の絵を、女の子は男の子の絵を描きなさい」

迷わず、私は席を彼のほうに向けた。彼の絵を描こうとした。彼も私のほうを向き、私の絵を描こうとした。二人の気持ちは一致していた。

描き終ると、先生が、みんなの絵を見せてくれた。やはり、一番上手なのは恵介くんの絵だった。あ、私ってこういう顔のかな、と彼の絵を見て、思った。

先生は、私の描いた彼の絵も上手だとほめてくれた。でも、実際の彼はちよっと違うのになあ、と思った。

みんなは恥ずかしがって、好きな子の絵を描けないでいた。恥ずかしいものだから、上手に描けないでいた。

うちに帰って、その日の絵のことをお父さんとお母さんに言ったら、

「お前たちの年では、まだ、異性の美しさなんてわからないよ」と言われた、大人って、何もわからないんだな、と思った。いつまでも私たちが子どもだと思っている。でも、私たちは、親たちが考えるよりずっと大人なのだ。

(4)

卒業の日が近づいた。それは、私と恵介くんにとって、別れの時を意味していた。私は新潟市の高校に行く。恵介くんは、進学はおろか、就職も許されていなかった。おじさんのうちにとっては、恵介くんは、大事な働き手だった。農家で働かされて、それもお小遣いももらえないまま。そんなひどいことが許されていいのだろうか？

恵介くんは、まだ小学生の妹がいるから、黙って耐えているんだろうか？

「ぼくは就職したいんだ」と彼は言う。「でも、今は我慢するしかない」

「定時制高校に行けるといいのにな」

「もっと時間があればいいのに、絵を描く時間がほしい」

中学校を出たら、図画の時間もなく、彼は絵を描かせてもらえなくなるのだろうか？ 親がいないって、そういうことなんだろうか？

私はお母さんに言った。「お金、ちょうだい」

「お金、何にするの？」

「絵が好きなのに描かせてもらえない子に、絵の道具を買ってあげるの」

中学生用の絵の道具ではなく、もっと本格的な絵の道具を、新潟市の店に行って買ってあげようとした。

「それはいいけれどね、なんでお前がその子にそんなにしてあげるの？」

「だって、いいじゃない。私、うちの仕事の手伝いはするから。前、おばあちゃんがいたときみたいに、お母さんの手伝いをするから」

「あんまり人にものをあげちゃいけないだよ」とお母さんは言いながら、それでも、お金はくれた。

ルンルン気分で、私は新潟市のデパートに行き、絵の道具を探した。なかなか見つからなくて、ちょっと大変だった。どう選べばいいのかもわからなくて、でも、どうやら水彩画の絵の具を買えた。

彼にどう言ってあげればいいのか、と少し迷った。彼は素直にもらってくれるだろうか？ 失礼にあたらないうだろうか？

学校へ持って行って、放課後、どきまぎしながら、そっと渡した。「これ、私から、卒業のお祝い」

「えっ？」

「これできれいな絵を描いて」

「……」彼は涙ぐんだ。「ありがとう、大切にするよ」

「あとは、絵を描く時間があるといいわね」

「うん」

## (5)

卒業した。

もう恵介くんとも会えない。むなしい、寂しい気持ちで胸がいつぱいになる。でも、恋をして、よかった。ノイローゼが治ったのだ。いつも、彼のことばかり考えて、切ない気持ちで、あの私を苦しめていた「死」の不安は、消えていた。

またいつか、彼と再会できるだろうか？ 再会できますように、と祈った。

再会の時はやってきた。

その日、高校の授業が臨時に早く終わって、私は駅に来ていた。上り電車を待つ

っていると、下り電車から大勢の人が下りてきて、その中に恵介くんがいた。

「あっ！」

驚いて彼を見る。

彼も私を見た。

「恵介くん」

「雪菜ちゃん」

「どこへ行くの？」

「弁護士さんのところへ」

「えっ？」

「うん、ぼく、もう我慢できない。絵を描かせてもらえないんだ」

「そう……」

「自分のことだけじゃなくて、妹のことだって。妹まで高校にやってももらえないんだ。自分のことだけならまだ我慢のしようもあるけれど、妹のことは我慢できない。ぼくたちのお金、おじさんから返してもらいたいんだ」

「そうよね、恵介くんたちのお金だものね」

「だから、弁護士さんのところへ相談に行くんだ。ぼく、やっとおじさんの家を出てきたんだ」

「そう……うまくいくといいわね」

上り電車がやってきた。名残惜しかったが、いつまでもそこにいられなかった。私は家に帰らなければならない。

「じゃ、さよなら、いつかまたきつと会えるわね」

「うん、後で手紙を書くよ」

じっと私を見つめる彼。彼をじっと見つめる私。電車は容赦なくそこを出発してゆく。

数週間後、彼から手紙が届いた。

——雪菜ちゃん、この前は思いがけず君に会えて良かった。

ぼくも、来年から定時制高校に行けるようになりました。弁護士さんがぼくの話聞いてくれて、後見人を前のおじさんから、別のおじさん（お母さんの弟）に替

えてくれました。

今度のおじさんは、ぼくと妹とを引き取ってくれて、ぼくたちを高校に進学させてくれるって言いました。でも、ぼくはお金を貯めたいので、新潟市で働きながら定時制高校に行くことにしました。お金を貯めて、高校を出たら東京の美術学校に行きたいのです。

雪菜ちゃん、ぼくを応援してくれてありがとう。君のことはずっと忘れません。君にもらった絵の道具も、大切にしています。

いつかまた、会えるといいね。――

ほんとにまた会えるといいなあ、と私は思った。

### 小城ゆん子 (1939年 4月11日)

戦争中に生まれ、空襲を体験。新潟市に疎開して一八歳までそこで育つ。後、千葉に転居。東京外国語大学卒。元中学教師。結婚後は塾や教材会社に就職。子育てと老親の介護の後、小説やエッセイを書いている。